

特集 基礎学力の育成

# 気づきを重視する 音声指導



田邊 祐司 (専修大学)

## はじめに

変容する英語の社会的な役割やそれにともなう言語教育理論の変遷は音声指導のあり方にも変化をもたらしました。海外では伝統的指導法の「見直し論」が起き、その内容・方法などの刷新がはかられました。しかし日本の現状はどのようなのでしょうか。「実践的コミュニケーション能力」という理念と実践の間にはギャップが存在し、胸をはって十分だとはいえないのが偽らざるところでしょう。

2006(平成18年)度改訂のNEW CROWN(以下、18NC)はこの問題に真摯に取り組みました。最新の理論を取り入れ、日本の指導現場の現状をふまえた音声能力の育成方法——それは基礎学力の養成でもあります——をめぐって討議を重ねてきました。その結果、新しい考え方を、全面的ではありませんが、SOUNDS、「サウンド・アドバイス」などに盛り込むことになりました。ここではそのエッセンスをお伝えします。

## 見直し論

一般に音声指導法は、習慣形成的な反復中心の手法(例:listen & repeat, 音読)と教師の音声学的解説による分析的な手法(例:発音口腔図, 発音記号)に大別できます。しかし、近年の音声能力不足に起因するコミュニケーション障害の事例や音声習得研究のデータは、こうした伝統型への疑問を投げかけています。伝統型の問題は、何よりも機械的で「心ここにあらず」の練習と音声知識の注入の傾向が強い「教師中心・学習者受け身」的な指導となり、その結果、本当の「音声基礎学力」が身につかないことです。

といっても伝統型を全面的に否定するわけではありません。その「良さ」は残しながらも、目標とする音声能力を身につけるには、どこを、どう改善すべきか、というのが見直し論の出発点です。

言語事実をそのままルールとして説明し、繰り返し練習をさせ、後は生徒にゆだねる「P-P-P型」(提示-説明-練習, presentation-practice-production)ではこれまでと同じ。それだけではなく生徒自身が気づき・発見(awareness & discovery)できるような相互活動(interaction)を仕掛け、それを足がかりにして、項目を主体的に学ばせる手法を併用してみようというのが見直し論の方法論上の中核です。

## NEW CROWN の具体例

18NCには生徒がお互いに助け合いながら発音やリスニングのコツをつかめるような工夫を適宜、盛り込みました。以下、教科書を用いた活動例を紹介します。

### [つづりと発音]

つづりと発音の関係を教えるには様々な方法があります。しかし伝統型では、やはり教師が教え込む傾向があります。もちろんそれも時には必要ですが、考えない、気づかない生徒を生み出してきたことも事実です。

a, e, i, o, u の読み方に注意しながら、次の単語を下の図の同じ仲間のところに書き入れてみよう。

sit, go, eat, catch, cup, nice

a cat ( ) name ( )

e pencil ( ) easy ( )

i six ( ) like ( ) (以下略)

TAKAHASHI SADDAO

SAKAI HIDEKI

HIDAI SHIGEYUKI

MORI CHIZURU

TANABE YUJI

18NC では以上のようなタスクを与え、生徒に相互・協同活動を通して、彼ら自身に考えさせ、背後に働くルールを発見させる試みを取り入れます。Listen & repeat や音読は、このようなタスクの後に組み込むと一層効果があります。

#### [音節の違い]

英語らしい発音を習得するには、日本語の拍(モーラ)と英語の音節(シラブル)の知識が必要となります。次はそのための気づきをうながす手法です。

次の日本語の、音のまとまりの数を数えて( )に入れてみよう。次に、英語のほうを数えて( )に入れ、日本語と比べてみよう。

例 フラワー (フ・ラ・ワー) (3)

flower (flow・er) (2)

カメラ ( )

camera (cam・er・a) ( ) (以下略)

ここでも、はじめから教師が構造の違いを教え込むのではなく、生徒に考えさせるプロセスを大切にします。

#### [英語のリズム]

英語のリズム・パターンの指導でも、発見・協同学習が応用できます。次の例は単語のリズムが文にもあることをつかませるものです。

左の単語と同じリズムをもつ文を右の中から探して、線で結んでみよう。次に、単語と同じ速さで文を発音するにはどうしたらいいか考えてみよう。

prob・lem ・ ・ ・ She likes it.

Ja・pan ・ ・ ・ He's Paul.

Sep・tem・ber ・ ・ ・ Thank you.

#### [音読]

音読は語学学習の要諦です。しかし形式・儀式的になってしまうと効果は期待できません。次はペアで生徒の一人が音読したものを、もう一人ができるだけ教科書を見ないで、相手の発音をたよりにリピート(シャドウ)するペア音読練習です。

意味の切れ目ごとにまとめると、発音がしやすくなります。次の文を意味の切れ目ごとに区切ってみよう。次にペアになり、相手が区切りごとに言うことをくり返して言ってみよう。最後には1文を通して言ってみよう。

Many animals have no homes in the wild.

このバリエーションをもうひとつ。「Backward Build-up ペア音読」です。

ペアで発音練習しよう。1人が読みながら文の最後から少しずつ発音していきます。もう1人は教科書を見ずにくり返してみよう。

sign language

learning sign language

you're learning sign language

why you're learning sign language

I know why you're learning sign language.

#### [サウンド・アドバイス]

🗣️の箇所は音声学習を助けるひと言ですが、ここにも新しい考え方が盛り込まれています。

強く読むところを考えて、リズムよく読んでみよう。

It is honey! の is は強く発音しよう。また、なぜ強く発音するか考えてみよう。

#### おわりに

音声指導では時として「学びの主体」である生徒に考えさせ、相互活動を通して、そこから彼ら自身が何かを気づき・発見するという「学びの原点」を奪ってしまう傾向がありました。18NC はそのような原点——気づきと発見の連続——を重視にした中学校検定教科書としては初めての「試みの本」と総括できます。